

# 戦国の中央舞台で光彩を放った『依田氏』

市村到さんの講演を拝聴して

小山田秀士（7組、丸子在住）

10月27日（水）、丸子夏期大学（@丸子文化会館セレス大ホール）で同期の市村到さん（4組）の講演がありました。同大学は今年コロナ禍のため何度も延期をしましたが、やっと開催の運びとなりました。今年で59回を数え、時どきの政治・経済・文化や興味を引くテーマを講師陣が話す伝統ある講演会です。市村さんの演題は「依田氏」についてです。

高校時代、丸子や武石から通ってきた同級生がいたと思います。そこは依田川が流れていて依田窪と言われていたことも覚えているかもしれません。

なぜ依田川で依田窪なのか？ に興味があって参加し話を聞きました。

市村さんは御代田町の生まれで、今もそこに住んでいます。依田窪からはかなり離れているのになぜ依田氏に関心を持ったのか？ 中学1年の時、美術の先生が依田氏（芦田氏）について熱く語った事が頭に残っていて、教員になった23才の時、「信濃資料」に依田信蕃（のぶしげ）が小諸城に入った記述を見て再び興味を持ち、以来50年にわたり依田氏を追いかけてきたとのこと。

依田氏の発祥の地は律令の信濃国小県郡依田の荘、「飯沼・中山・内村・腰越・さなだ」のあたりで、合併前の丸子町の大部分が相当します。当初の本拠地は御嶽堂あたりではなかったかとのこと。

依田の荘に最初に入部した源為実が依田為実を名乗り、いとこの源（木曾）義仲を依田城の館に迎えた。義仲は依田城、白鳥河原で拳兵し京へ攻め上り平家を倒したが滅ぼされ、依田為実も没した。その子孫は帰郷し雌伏していたが足利幕府に重用されるようになり信濃国支配を任された時もあり、歴代幕府の中で大役を担っていたとのこと。このころ依田の荘から佐久郡に進出して、芦田城（佐久郡立科町）に拠ったとのこと。

武田信玄が佐久へ進出した時、幼い芦田城主の依田信守は殺されず臣下となり、その後上田原の戦い、砥石城の戦い、川中島の戦いに、常に信濃先方衆の侍大将（150騎）として真田幸隆（200騎）とともに戦ったとのこと。

その子の信蕃は遠州二俣城の籠城戦の末、信玄の命により城を明け渡した。その作法に則った所作が家康の目にとまり、後に武田勝頼滅亡後、家康の計らいにより命を救われて臣下となったとのこと。家康の命により真田昌幸を徳川方につけ、協力しながら北条軍の糧道を断ち、圧倒的に勝る北条と和議に持ち込んだ大成果をあげましたが、その後の小さな戦いで命を落とします。

信蕃の死を悼んだ家康はその子に、松平姓と「康」の字を与え松平康国となり

ました。小諸城主となり第一次上田合戦の折には徳川軍の基地となり、神川合戦では徳川軍の総崩れを防いだとのこと。しかし、その後の戦のあと、降伏してきた敵将に油断したために殺されてしまいます。

勇猛果敢、頑固で忠告は聞かない、人を信じやすくそれが油断となって遭難する、依田氏（芦田氏）三代の性格の傾向がうかがえるとのことでした。

1時間30分の講演時間が短く感じるほど立て板に水の、印象に残る講演会でした。地元の依田窪から始めて、鎌倉室町、そして戦国時代にその節目節目で大きな活躍をした依田信守、信蕃、康国の三代の動きを手取るように話してくれました。配られた資料は講演会ではありえない64ページもの大作で、彼らの戦いの戦場、拠った城などほとんどを歩き、また計測して絵図にしてあり、写真もふんだんで実にわかりやすかった。

講演会には地元始め依田姓の方や歴史好きがたくさん来たのは勿論、65期も筆者の他に5人参加し、講演会后、市村さんを囲み慰労会を近くの居酒屋で開き、より内容を深め旧交を温めました。

この文章は、その時配られた資料を見ながら聞いた内容を思い出しながら書きました。

康国の弟康実は不慮の死だった兄康国を弔い、祖父信守の拠城だった佐久の春日城麓に康国寺を開基したとのこと。秋も深まったら、戦国時代に光彩を放った依田氏三代を思いながら行ってみようかと思えます。

(2021年11月3日記)

